Indoor Environment, Vol.26, No.2, pp.133-134, 2023

国際室内空気質気候学会第17回国際会議（Indoor Air 2022）参加報告

東　賢一

関西福祉科学大学健康福祉学部
〒582-0026 大阪府柏原市旭ケ丘3丁目11-1

A report on Indoor Air 2022

Kenichi AZUMA

Faculty of Health Sciences for Welfare,
Kansai University of Welfare Sciences
3-11-1 Asahigaoka, Kashiwara, Osaka, 582-0026, Japan

2022年6月12日から16日にかけて，フィンランドのクオピオで国際室内空気質気候学会（International Society of Indoor Air Quality & Climate, ISIAQ）主催の第17回国際会議（The 17th International Conference of the International Society of Indoor Air Quality & Climate, Indoor Air 2022）が開催された。ISIAQについては説明するまでもないと思うが，1992年に設立された室内空気に関する国際学会である。日本では1996年に名古屋で第7回国際会議が開催された。

第17回国際会議の大会長は，東フィンランド大学環境科学部門のPasanen教授であった。本会議のメインテーマとして，「Healthy People in Healthy Indoor Environments」を掲げていた。このテーマには，健康アウトカム，曝露，発生源，曝露因子の動力学，新しい材料，新しい分析方法の開発，建築物の持続可能性などの領域が含まれている。室内空気に関して，医学，環境学，物理学，化学，建築学など分野横断的に議論を行いたいという気持ちが込められている。今回の国際会議では，口頭発表とポスター発表あわせて約450の発表があり，その他にもワークショップが多数開催され，各会場では活発な議論が行われた。

2014年以降，Indoor Air国際会議は2年ごとに開催されてきた。2014年には香港，2016年にはベルギーのゲント，2018年には米国ペンシルバニア州フィラデルフィアで開催され，2020年は韓国のソウルで開催予定であった。私は2005年以降，毎回Indoor Air国際会議に参加してきた。しかしながら，2020年初めに起こった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックの影響により，2020年のIndoor Air 2020はバーチャルで開催された。私はIndoor Air 2020の国際科学委員会の委員であったが，委員としてはabstractの査読のみで，現地では何ら貢献できず，オンラインで口頭発表を行うのみであった。Indoor Air 2022は，現地で対面開催され，久しぶりに対面で議論ができる国際会議となった。但しCOVID-19のパンデミックは継続しており，諸外国への出入国に対する制限もあり，貴重な体験をいくつも重ねた。

2022年6月の段階では，日本からの出国に制限はなく，空港ではスムーズに出国できた。私はフランスのパリ経由でフィンランドへ入国したのだが，パリの空港内ではコロナ禍以前のように人々が過ごしていることにまずは驚いた。マスクを着用している人はほとんどおらず，普通にテーブルを囲んで飲食をされていた。まるでコロナ禍前のような風景であった。ヘルシンキ経由でクオピオに到着したのだが，クオピオ市内の様子も同様であった。日本への帰国にあたっては，フィンランド出国前72時間以内に医療機関でPCR等の検査を受けたCOVID-19陰性証明書が必要であった。クオピオの医療機関ではPCRの検査結果が届くまでに2〜3日ほどかかることから，クオピオ到着後すぐにPCR検査を受け，クオピオ空港出国直前（クオピオ空港で搭乗前に荷物を預ける直前）に陰性証明書をメールで受け取った。まさに間一髪であった。

Indoor Air 2022の会場でもマスクを着用している人はかなり少なかった。会場での受付時には，不織布マスク2枚と抗原検査キット4個が配布された。私は日本在住時同様に終始マスクを着用していたが，口頭発表の会場でフロアーから私が質問する際には，座長からマスクを外して発言するよう促された。会場には二酸化炭素濃度モニターもみあたらなかった。おそらく感染予防に関しては，自己管理してください，ということであったのだと思う。そのような状況であったためか，学会主催の懇親会の翌朝に参加者に向けて事務局からメールが届き，前日の懇親会参加者でCOVID-19の陽性者が発生したというものであった。私は懇親会への参加は自粛したのだが，日本人にもCOVID-19の陽性者が発生し，帰国時に欧州域内の空港で隔離されたものもいた。学会内でクラスターが生じたのではないかと懸念している。Indoor Air 2022には，COVID-19の研究を行っている研究者も多数参加していたのだが，何とも言い難い出来事であった。私は外国出張の条件として，帰国直後に所属機関の大学病院でPCR検査を受けて陰性であることを確認してから大学構内へ入構するよう指示を受けており，帰国直後の検査で陰性であったため，フィンランド滞在中での感染はなかったと判断している。

Indoor Air 2022の様子へ戻ろう。日本では外国出張への制約が大きい所属機関が多いためか，日本からの参加者はかなり少なかった。しかしながら，欧米諸国からは通常通りに参加されている研究者が多く，いつものメンバーが多くそろっていた。会場内は和やかで，通常通りに議論も活発で，対面での国際会議の良さを改めてしみじみと感じた。例年通り，健康影響，生産性，曝露評価，VOC，SVOC，粒子状物質，微生物，室内化学物質の挙動，換気，フィルター，温熱，湿気，発生源，リスク管理といったトピックの発表がなされていた。私は「Integrated evaluation and management of indoor air quality in modern office buildings」のワークショップを主催し，ミラノ大学のCarrer教授とともに座長を務め，講演を行った。参加者との議論も活発で有意義なワークショップであった。

Fig. 1　Main entrance in Indoor Air 2022